

『自警』 1

大学と国際流動性

2014年11月28日

近代的意味での大学の起源は中世ヨーロッパにあるといわれます。それは、自然発生的なものでした。イタリアのボローニア、フランスのパリ、イングランドのオックスフォードなどにいつのまにか教師と学生が集い、高度な学問と教授が行われました。なかでも有名なのはヨーロッパ最古といわれるボローニア大学です。

ボローニアではローマ法が現行法として教えられました。講義が開始されたのは11世紀後半のことと言われています。イルネリウスという文法学者によってはじめられた古代ローマ法に関する講義の内容が革新的で、有益であるという話がすぐに全ヨーロッパに広まり、各地からボローニアに学生が集ってきました。

ボローニアに集まってきた学生たちは、自分たちの安全と便益そして心の拠りどころのために相互扶助のための同郷会をつくりました。同郷会は **natio** とよばれましたが、この **natio** はもともと「生まれる」という意味の言葉と結びついており、英語の **nation** の語源となります。ボローニア大学では、この同郷会は10をはるかに超え、学生数も最盛期には1万人ほどだったといわれています。大学が非常に国際的で、ヨーロッパ全域から多数の学生を集めていたことがわかります。

教師も国際的で、流動的でした。有名教授の引き抜きはよくあったようで、ボローニア大学では教授が両替商にお金を供託したそうです。もし教授がひそかに大学を離れて他大に移った場合には、その供託金は没収されることとなっていました。それでも、供託金の分を含めて引き抜きが行われることがしばしばありました。自分の資格と能力によって高い地位と自由を得る専門人が「身分」を基軸とする封建的中世ヨーロッパに出現したわけです。これは実に画期的でした。たとえごく僅かとはいえ、教育によって身を立てることが可能となったからです。

有名教授の引き抜きどころか、大学内での対立から集団で教員と学生が移動して新しい大学を創ることもありました。これは移動によって成立した大学といわれます。その代表はオックスフォード大学から離脱した教授や学生たちが創ったケンブリッジ大学です。ですから、一般的にオックスフォード大学は保守的で権威的だが、ケンブリッジ大学は進歩的でリベラルだといわれます。もちろん、これは一般論です。ケンブリッジ大学だってかなり保守的で権威的に見えることはあります。

むろん、中世ヨーロッパで大学教育を受けるには多額の資金と危険が伴いました。そもそも大学にたどり着くまでが大変でした。道路では、強盗や窃盗がごく当然のように行われていました。宿屋らしきものはあってもかなり怪しいものです。しかも、大学のある街に無事たどり着いたとしても、教授に支払う謝礼や住居費は相当なものでした。意外なことに、街の人々、とくに商店との対立もありました、借金の取り立てを同郷の仲間を求めるのもごく

普通でした。これを復仇といいます。このような状況を鑑みて、イタリアに遠征をしていた神聖ローマ帝国皇帝フリードリヒ赤髯王は、1158年に「ハビタ」と呼ばれる、とくにボローニアで学ぶ学生の特別平和（安全保証）の法律を発布しています。それは、「学問を修めるために旅する学生達」、「神聖なる市民法の教師達」に「彼等もしくは彼等の使者が、学問を修める場所に安全におもむき、そこに安全に滞在し得るものとする」（勝田有恒「最古の大学特許状 *Authenticum Habita*」一橋論叢 69・1、1973）ことを定めています。もともと、ハビタが出されたからと言って、旅と街での学生生活がすぐに安全になったわけではありません。皇帝権力といえども、各地域を直接的かつ実効的に支配していなかったからです。

それにもかかわらず、多くの人々がそれだけの出費と危険を冒して大学に入学したのは、学問を愛したからだけではなく、それに見合うだけの将来の利益が予想されたからです。聖職者を目指す者たちが神学部で学ぶのも、法律家や官僚となるために法学部で学ぶのも、その地位を得た時に獲得できる利益がはっきりとしていたからです。著名な法学者であったバルドゥスは授業で自分の儲け話をして、勉学する学生たちを鼓舞したという話が残っています。大学はもちろん知性の府であり真理追究の場にほかなりません。具体的な利益よりも、知そのものの得もいえぬ魅力に取りつかれる者たちも少なくありません。しかし、それと同時に大学でどのような能力（コンピテンツ）が個々の学生に付与されるのかがはっきりとしていることも大切です。知そのものの魅力と社会で有益な能力と威信の獲得という二つは、実は中世ヨーロッパ以来、大学教育の本質に属することなのです。

しかも、中世ヨーロッパではいま以上に大学で学ぶ効用は普遍的でした。大学の学位が国際的で広い通用性をもっていたからです。中世ヨーロッパの大学ではヨーロッパ共通語としてのラテン語が用いられ、そこで得た博士の学位はどの大学でも教えることのできる万国教授権として授与されました。また、学位を得て各地の王侯貴族の顧問となるなど、学位に対する信頼は国境を越えていました。学位を得るには長い年月と資金が必要とされましたが、その通用性はヨーロッパ全域に及び、その効用は多大でした。学位が国際性をもち、獲得の苦勞に値する十分に魅力的な市場が開かれつつあったので、学生たちはその危険と勉学の負担に耐えたのでした。

大学の学位は全ヨーロッパ的に通用したので、学生たちは安心して移動することができました。中世の大学は意外なほど流動性（モビリティ）の高い組織でした。それどころか、大学の側からの学生の集団的引き抜きすらありました。その興味深い例として、フランスでパリ大学について古いトゥールーズの例をあげることができます。13世紀前半に実行されたアルビジョワ十字軍という異端撲滅の凄惨な戦いで荒廃したトゥールーズを再建するために、ローマ教皇は大学を設置することを決め、「トゥールーズへのいざない」（「トゥールーズの教師たちから他の諸大学への手紙」、1229年）と題され手紙を各地に発信しました。これはヨーロッパ全域とくにパリから教師と学生を引き寄せるためのものでした。「手紙」は、トゥールーズには「平和があり、世界の他のところでは軍神マルスが荒れ狂っている」とその環境の良さをうたっています。

ちなみに、今年（2014年）のノーベル経済学賞は、このトゥールーズ大学（第一大学、トゥールーズ・スクール・オブ・エコノミクス）のジャン・ティロール教授に与えられました。長い伝統の賜物ともいえますが、実は昨年2013年に、一橋大学はティロール教授に名誉博士号を授与しています。教授のそれまでの素晴らしい業績を評価して授与したのですが、19世紀に創られた日本の大学である一橋大学がこのように学問の通用性と普遍性そして知性の流動化に参加しているのは興味深くかつ重要なことといえます。

さて、ヨーロッパにおける学生の流動性の高さはその後も続きました。ルネサンス期には *peregrinatio academica* とよばれる学生の在学中の移動が頻繁に行われました。とくにドイツ人学生が熱心で、17世紀においてもっとも先進的で最初の近代的大学と呼ばれたオランダのライデン大学を例にとりますと、1639年の統計を見ると、550名の入学生のうち実に158人がドイツ人学生でした。ライデン大学よりもドイツ人学生が多いドイツの大学はケーニヒスベルク大学（274人）とケルン大学（253人）くらいでした。ドイツでは、やがて学習の内容そのものよりも、いくつの大学を渡り歩いたかが重視され、そのことが競われようになつた、ともいわれています。

同様のことは、イングランドで行われた「グランドツアー」にも見られました。グランドツアーというのは、17、18世紀イギリスの上流階級の子弟がオックスブリッジの学業の最後に数か月から数年にわたって大陸に渡り、主としてフランスやイタリアですごしたことをさします。若者の海外で経験を重視したわけです。しばしば専属の家庭教師が彼らに同行しました。生計の当てのない知識人はこの当時、貴族の子弟の家庭教師として糊口をしのいでいました。実は、今日よくその名を知られている、偉大な思想家ホブズもロックもその一人でした。そして、二人とも貴族の子弟の家庭教師として大陸に渡り、自身の知的世界をますます鍛えていきました。当の学生よりも家庭教師のほうが知的な交流にいそしんだ、ということになりますが、これは素晴らしい副産物でした。とりわけ、ホブズがパリでガッサンディやデカルトと知り会い、その思想に磨きをかけたという話は有名です。知のモビリティはこのような形でも実現されていたのです。

EUが現在行っている高等教育の広域的な流動化政策はこのような伝統を踏まえて出てきたものです。その政策が、ボローニア計画の名のもとに推進されてきたのは、ヨーロッパで最古の大学であるボローニア大学にヨーロッパ全域から危険を冒しても学生が集まってきた、という歴史的事実とその文化的伝統の自覚のうえに計画が立てられた、ということから伝えています。

日本にも遣隋使、遣唐使の伝統があります。多くの向学心に富んだ若者たちは、この使節団のなかに入り込み、命を賭して危険な航海に臨み、海外で学びかえってきました。日本国内でも師を求めて遠隔の地に出向くことはごく自然に行われていました。明治維新を起し近代日本を動かしていった少なからぬ人々も外国で学んでいます。伊藤博文ら長州ファイブはロンドンに密航してUCL（ユニバーシティ・カレッジ）で学びました。一橋大学の開祖で日本近代有数の啓蒙思想家であった森有礼先生もまた、他の鹿児島島の18人とともにロ

ンドンに密航し、やはり UCL で学びました。そこで学び、実際にロンドンを見てきたことがどれほど彼の思想と行動に影響を与えたか、計り知れないものがあります。その一行の中には後に開成学校（東京大学の前身）の初代校長となった畠山義成や帝国博物館の初代館長となった町田久成もいました。留学が大学や文化に深い影響をあたえることはいまでもありません。

もちろん、大学に留学しなくても、海外で仕事をすることで深い知見を得ることも可能です。早世した森有礼先生以上に一橋大学の成長に深く関与した渋沢栄一翁もまたその一人でした。翁は青年時代に一橋家の執事としてフランスに渡航し、パリで体験したことを咀嚼し、経済人の地位の高さに驚き、日本にも健全な経済社会を創ろうとしました。渋沢翁はそのために全身全霊を捧げましたが、教育にも強く配慮しました。パリで見た堂々たる経済人を創るために堂々たるビジネススクールを日本に育てることを目指しました。それが商法講習所でした。渋沢翁が学生たちに期待したのは、「外交—対外的商売」の担い手となることでした。しかも、それは「商業道徳」を不可欠としました。これをともに教えるのが「高級の教育」つまり大学教育でした、

グローバルとは、世界を考え、世界に生きることです。世界の中で競争すると同時に、世界の中で協調し協力することです。協調し協力するには相手を理解することが必要です。そのためには、直接相手と会うこと、交流することが大切です。大学は共存し、協調し、協力する人々から成る世界を創るために努力し、そのような人材を育てることに尽力しなければなりません。そのためにも、人と知の流動化は不可欠なのです。

グローバル化と流動化の時代のもとで、日本の大学もまた閉じた大学ではなく、開かれた大学として、グローバルに学生や研究者を行き来させ、その流動性を高めることが大切です。そのために、まずカリキュラムの国際通用性を確保すること、つまり質が高く、内容が明確で、得られるものが明示されているカリキュラムが必要です。しかも、海外の学生を引き付けることのできる個性がなくてはなりません。そのためにも、私たちは、質が高く密度の濃い教育カリキュラムを作成し、互換的基盤に基づく効果的な学生交流を実現することを目指さねばならないと思います。

その先駆的な試みを開始したのが、この 4 月に開設された一橋大学森有礼高等教育国際流動化センター（以下、森有礼センター）です。森有礼センターは、高等教育における国際的流動性の研究、企画、実践の拠点を目指していますが、森有礼先生のように、志と知見と目標の高さによって日本のみならず、世界の高等教育に貢献し、アジア太平洋における重要拠点、世界的にも注目される高等教育の研究実践組織として活動してほしいと私は願っています。

今日は私が一橋大学長として大学で勤務する最後の日です。このような日に、森有礼先生を精神を引き継ぎ、発展させることを使命とする森有礼高等教育国際流動化センターの『自警』に最初の一文を載せることができるのはこのうえなく喜ばしく、名誉なことと思います。

森有礼センターと『自警』が高等教育に関する日本の知見の最高の発信の場になることを

期待しかつ予感しつつ、この記念すべき稿を終えさせていただきます。